

古志青年部年間作品集 第四号

目次

卒業歌	16
日永	14
ホットワイン	12
つま先	10
卒業	8
翼	6
■自選十二句	
〈俳句作品〉	5
イーブン美奈子	
石塚直子	
市川きつね	
大塚哲也	
岡崎陽市	
金澤諒和	

光さす顔	渡辺竜樹	36
明け方	吉富 緑	34
歩き出す	森 篤史	32
俊成	西村麒麟	30
金魚	内藤 廉	28
牡丹	辻 奈央子	26
氷	丹野麻衣子	24
うれひ	竹下米花	22
福笑	高角みつこ	20
春の塵	関根千方	18

■三十句競詠

凧／燕

石塚直子

38

雪／海鼠

市川きつね

40

氷／梟

山内あかり

42

■青年部入会案内

〈文章〉

■講評

鎌田 俊

46

■青年部合宿句会報告

石塚直子

59

■青年部年間活動記録

64

俳句作品

翼

イーブン美奈子

麗かに紙ヒコーキで廻る旅
一枚の地球の空を鳥帰る
踏青や翼を纏ひたるごとく
袋掛して愛ほしき一樹かな
一陣の風をこの世の涼とせん

本の山崩れて夏の雲白く
夜濯や大きい宇宙の隅つこで
揺られつつ金魚一匹買はれゆく
昼寝なぞ大きな顔ですればよし
煙草屋の角にまた魔女ハロウイーン
ぶつぶつと切りたる鱈を大鍋に
風の子の駆け回りる暖炉かな

■一九七六年生まれ。神奈川県出身、タイ国バンコク在住。古志同人。ホームページ部部長。海外日系人協会の第四回みなとみらい文芸祭にて海外日系人協会理事賞、第八回、第九回同文芸祭にて文芸祭賞受賞。

卒業

嘯み締めん卒業の日の朝ご飯

半生は学んでばかり花菜摘む

水といふ水輝ける五月かな

穀象の湧いても美味し郷の米

夏休み積ん読崩すところから

石塚直子

辞書繰りて眠れるまでの夜長かな

案山子にも父母あるか子はをるか

マフラーで言へぬ言葉を隠しけり

餅背負つてあれよあれよと人波に

祖母の手のぬくみごと受く御年玉

耳なりの止みし今宵はみぞれきく

七草の力授かり句作せん

■一九八七年生まれ。茨城県出身、
東京都在住。古志同人。古志青年
部部長兼校正部部員。

つま先

その人のすでに影なき焚火かな
我が命にもかへがたき春の服
猫の子となりてお側に仕へたし
桜餅楊枝で裂けぬ葉つばかな
もともとは小さき街や岩清水

市川きつね

山羊鬚を撫でて早の年のこと
向日葵やおむすびだけのお弁当
なんといきいきと草を刈ることよ
酔漢を叩き起こして西瓜買ふ
秋灯うるさがられてゐたりけり
羊群川のごとくに枯野ゆく
つま先で煙草つぶしてクリスマス

■一九八七年生まれ。新潟県出身、
ヨルダン・ハーシミールヤ王国在住。

ホットワイン

大塚哲也

人生は山あり谷あり桜あり
春昼やクラス替へてふ大仕事
銀河てふSLに乗りゆく春ぞ
新涼の牧草ロール転がさん
虹立てば虹の話の授業かな

大浅間 小浅間 みえて 籠枕

震災の御魂 ここにも 蛍の火

父の魂 みちのくの魂 曼珠沙華

東京 といふ 岩の山 冬 茜

断乳に 大泣きの子や 冬の朝

卒乳の妻へ 注ぎ足す ホットワイン

お風呂から 子のはしやぐ 声大晦日

■一九八一年生まれ。東京都出身、在住。

日永

岡崎陽市

ゆるやかに河ながれゆく日永かな
目つむればうかぶふるさと春の風
かげろふのなかに大仏座しゐたり
一日をしづかにさわぐ若葉かな
湖よりも青き山々ほととぎす

飛込めばひかりきらきらきらと

秋立つといつせいに草そよぎけり

はれてゆく霧の中より金刀比羅宮

すず虫のはるかなこゑや籠の中

花鳥風月こよひは月を仰ぎけり

つぎつぎと雲が飛びゆき冬に入る

ゆく人のふつと消え入る吹雪かな

■一九七二年生まれ。愛媛県出身、在住。古志同人。二〇一〇年古志新人賞受賞。二〇一五年「KAI」ネット投句年間賞。

卒業歌

金澤諒和

逝きし子の名前も呼ばれ卒業す

ヒロシマに若葉フクシマにも若葉

端居してうなづくだけの母とゐる

球児より監督泣いて雲の峰

捕虫網決戦の日を待ってる

レコードの針やはらかき星月夜
行きずりの空を褒め合ふ秋遍路
いくたびも縫はれし旗や運動会
夜神楽や喉を焼きたるかつぽ酒
搗きあげて餅はやはらか海は風
冬怒濤テトラポッドに噛みつきぬ
子どもらのあぎと美し卒業歌

■一九七一年生まれ。神奈川県出身、大分県在住。足利文芸賞入選（短歌）。第十八回毎日俳句大賞入選。

春の塵

立秋の蟬の殻より白き紐

毛坊主の子沢山とや衣被

数多なる南瓜が灯し行く秋ぞ

影ばかり大きくなりて枯野ゆく

眠りゐる山を起こしに来し如く

関根千方

くろがねをはねて出でたる鯛焼ぞ
獅子舞の口よりのぞく此の世かな
春塵のふりつもりてや寂光土
みな春の塵よりなりてまた塵に
底に足つきかけてまだ蛙の子
源五郎も掻いてをるなり代田水
幾万の夏のかけらの貝殻よ

■一九七〇年生まれ。東京都出身
在住。古志同人。古志東京支部長
兼ホームページ部部长。二〇一〇
年古志新人賞受賞。二〇一四年第
九回飴山俳句賞次点。

福笑

高角みつこ

一本のすがたのままや土筆和
奥座敷どかりと占めて鰻食ふ
肝心なときに失せたる扇子かな
雨だれの音に眠るや燕子の子
菩提子をポケットに入れ京にあり

十文字深く刻みて大根炊く
いかやうにも女の顔や福笑
初戎鯛に手を出す赤子かな
やきもちも花なりバレンタインの日
香水はつけぬ性分母ゆづり
筍や人類は知恵惜しみなく
ゆらめいて一葉に戻る新茶かな

■一九七三年生まれ。兵庫県出身、
大阪府在住。古志同人。古志校正
部部員。NPO法人季語と歳時記
の会主催第一回「恋の俳句大賞」
受賞。

うれひ

竹下米花

ほつとかれたるくちびるにしぐれかな

うどんすき底の方から佳句出て来い

紐育料峭紙コップの珈琲

春愁のひとりずつ寄る喫茶店

蛭烏賊だいすきでゐて下戸でゐて

春泥に左手袋呉れてやり

世にうまくゆかぬことあり朝寝あり

珈琲豆つやつや光る梅雨入哉

はんぎぎに叡智ありともあらぬとも

金魚屋のすくなき黒に鼯鼠の目

寝転んで汽車を待ちをり星月夜

印度

今生はたましひ預け案山子なり

■一九七四年生まれ。神奈川県出身、京都府丹後地方在住。古志同人。

氷

丹野麻衣子

ソチといふ氷の国へ戦ひに
いういうと巢は本丸につばくらめ
脚太き駄馬といへども子は可愛
見覚えの草がまた生え田草取り
米櫃をふるさとにして米の虫

一塊の氷を挽いて氷室守

絹の道はろぼろと来し紙魚ならん

団扇絵となりても富士の大ききよ

水中花水を選ばず花盛り

里芋は葉をばさばさと太るらん

月今宵ますほの小貝拾はんと

名人の牛蒡を引きしあとの穴

■一九七四年生まれ。石川県出身。神奈川県に育つ。東京都在住。古志自選同人。古志同人会副会長。二〇〇七年第三回飴山實俳句賞受賞。

牡丹

餅よりも大き橙据ゑてあり

老幹を撫づれば開き梅の花

山彦を飲みこんで山笑ひけり

ここいらの桜は掃くな飴山忌

音立てて牡丹の今ひらきさう

辻
奈央子

薰風や張子の虎の首揺るる
この国の憂さもあふがん団扇かな
涼しきは女人高野の一本道
さつぱりと山洗はれて大文字
この枯葉集めて猿の蓑とせん
お手製の善哉食うて炉を開く
身を切つて俳句するなり初氷

■一九七七年生まれ。神奈川県出身、在住。古志同人。古志編集長。

金魚

内藤
廉

麦の秋雀は何を拾ふかな
衣更母にまかせて水の泡
静岡県金魚の形と教へけり
思案する登山計画聖岳
ある日かも庭一面に南瓜の葉

夏木立伐りて親子の会話かな
葉の茂る畑に降り立つ胡瓜かな
水遊び父の額に汗光る
黒蜜の水晶光る心太
束の間の流れの中や囀鮎
衣被つるりと剥きて羽化させん
雨音や明日は雪と床につき

■一九八一年生まれ。宮城県出身、
静岡県在住。

俊成

西村麒麟

秋富士や小舟をすいと滑らせて

角隠し松の手入に見られつつ

魯田の千葉が広々ありにけり

俊成は好きな翁や夕焚火

初雀鈴の如きが七八羽

金沢の雪解け水を見て帰る
また揺れて大きな夜の桜かな
文鳥に覗かれてゐる花疲れ
鳥の巣けふは鳥がゐたりけり
大鯰ぽかりと叩きたき顔の
月光や椿の杖を遊ばせて
桃食うて昨日も会ひし観音に

■一九八三年生まれ。大阪府出身、
広島県に育つ。神奈川県在住。第
一回石田波郷俳句新人賞受賞。第
四回芝不器男俳句新人賞大石悦子
奨励賞受賞。第五回田中裕明賞受
賞。

歩き出す

森
篤史

でかく書く大といふ字の涼しさよ
背中より父に似てくる裸かな
歩き出すやうに消えゆく夕虹よ
爽やかに騎馬戦終へし鼻血かな
人が持つ母国の臭ひ大晦日

肥満の祖母浮きて楽しき初湯かな
丁寧に席に尻乗せ初電車
竜の玉誰にでもゐる守り神
先生と連れ小便し卒業す
桜東風千里先まで田は続き
昼の顔夜の顔持ち桜見る
春風や振り向けば道前も道

■一九九〇年生まれ。埼玉県出身、
在住。古志同人。

明け方

応援の群れを離れて土筆摘み

花束に勿忘草の混じりけり

花の山となりの山も花盛り

湯の町にせいろの湯気と鯉のぼり

母の日が食べ頃といふメロン買ふ

吉富
緑

明け方の湾の広さやヨット出づ
荒梅雨に四方を囲はれ昼餉かな
雷や昼寝のわれを世に戻し
傾けて日傘の中の欠伸かな
短夜の夢の続きや鳥の声
浮輪して昼餉に戻る浜育ち
どの茄子や親指刺して知らぬ顔

■一九六八年生まれ。長崎県出身、福岡県在住。

光さす顔

渡辺竜樹

観念を花のごとくに吹き上げん
こまごまと開いてにぎやか蚬汁
君に酌む春なみなみと手取川
草餅や恋の手負ひをものとせず
古九谷の緑に春の動きけり

捕虫網あらがひて虫金色に

東海に浮かぶがごとく大昼寝

金魚田に金魚のみゆる今朝の秋

ぐずぐずといふ無花果のやうな人

稲妻のごとく一句の浮かびけり

いちじくの皮もろともに食べけり

熊笹や月光に道拓けゆく

■一九七六年生まれ。愛知県出身、在住。古志名古屋支部長。二〇一〇年第五回飴山實俳句賞受賞。二〇一二年第五十八回角川俳句賞予選通過。

凧／蕪

石塚直子

深川や木枯に貝育ちたる

木枯らしも辞典が好きか頁繰る

木枯らしに剥がされまいと蓑の紐

レコードが終はり凧聞きるたり

木枯の浚つてゆける涙かな

凧に押されて汽車の出發す

凧が競つて甘くする柿よ

凧に押され見知らぬ道ゆかん

木枯に流されながら遊ぶ鳩

凧に巣箱をとべぬ小鳥かな

凧も閉まる扉に滑り入り

木枯しについてゆかんとする葉あり

ふてぶてし顔を出したる畑の蕪

どの畑の蕪なりしか転がりて

蕪干しこれも家伝にして日課

洗はれていよいよ赤き蕪かな

わが畑の顔になれよと蕪磨く

確かむる包丁の切れ蕪微塵

土地神に飾るスズ菜のめでたさよ

健き手や大蕪さへもひと抜きに

蕪引く母の背にゐしころのこと

ふるさとの蕪売られて行きにけり

とびきりの醤油吸はせて蕪煮ん

負ける日もありてよかれと蕪食ふ

紅白の蕪を添へて祝膳

蕪に彫る直といふ字のむづかしさ

蕪摺つてかの日の雪を想ひけり

蕪煮て帰国の友をもてなさん

蕪汁母の小言も懐かしき

われもまた過客の一人蕪汁

雪／海鼠

市川きつね

ふるさとの雪にあらねど雪明り

雪樂し雪に転んでなほ樂し

焼き直すかちかちの餅雪しまく

ざくと挿しぐいと持ち上げ雪を搔く

除雪車は太陽を背に進みくる

粉雪の吹き溜まりゆく机かな

大雪や部屋あたたかく散らかして

ご自慢の味噌をもらひに雪帽子

亀虫をご免と捨つる雪の窓

隣国の戦にもふれ雪見舞

駆け出してバスに飛び乗る吹雪かな

雪折れやさらに大きく育つべく

ここよりは一人で歩む雪の道

たちまちに祭はもとの雪野原

はるばると海鼠を釣りに来たるとか

箱眼鏡海鼠の海を覗かんと

雪つけて親しき顔が勢ぞろひ

しばらくは海鼠となつてやり過ごす

輪になつて色紙書き込む雪夜かな

海鼠一つ身を折り曲げて釣り上がり

雪国の雪にまみれて生るるもの

海鼠突く銛なげ出して熟寝かな

指二本くはへて笛や雪日和

海鼠舟くるりくるりと回りけり

つかまへて子どもを放る雪の山

さつきから海鼠ばかりをつまむ箸

雪下ろし家ゆすらるる楽しさよ

海原に海鼠のごとき島一つ

笹ずしの笹つみに出ん雪月夜

日出る国の隅つこ海鼠干す

氷／梟

山内あかり

氷るものとけゆくたびに虹色に
ざくざくと氷の道を地底まで
氷より冷たき身体横たへて
いちまいの龍の鱗や湖水る
天空に踏み出すこち氷の上
荒海を閉ぢこめてゐる氷かな

昨夜の月氷の底に青々と
夜間飛行こほりのかけらきららと
氷像の馬はしづかにとけはじめ
岩を割り樹を裂き闇は氷りゆく
くるぶしも膝も氷や麻酔醒む
氷の夜獣のこゑの美しき

我が俳句氷の芯の太々と 発電所氷のごとき大扉
たましひのいつもどこかに氷張る 梟のごとき婦人は嫌ひなり
氷結やみづうみの砂動きつつ その中に梟のゐて動かざる
喉仏こほりのごとくしろじろと ふくろふや影には影のなかりけり
銀盤に氷の花の幾輪も 梟は流星のごと飛びゆけり
氷の手鼻も真つ赤にして子ども ふくろふは縦に伸びたり縮んだり
リフト乗る氷の椅子に乗るやうに 梟や飼ひならされて肉を裂く
一夜にて氷の家となりにけり ふくろふの笑ふ日あらば泣く夜も
でこぼこの氷の道のおそろしき 梟やモナリザに似てしやべらざる

■一九六八年生まれ。新潟県出身。京都府在住。古志校正部部長

入会案内

- 「古志」の年会費は一万二〇〇〇円です。
- 二十五歳未満（その年の一月一日現在）の場合、年会費は三〇〇〇円です。
- 会費の納入は郵便振替で振り込んでください。
- 振込み人欄に、氏名・併号（ふりがな）、生年・月、男女、郵便番号、住所、電話番号を明記ください。
- 郵便振替口座の番号は、次の通りです。
古志社 0010007512480
- 古志青年部に参加できるのは五十歳未満の古志会員です。
- 古志青年部ブログのURLは、
http://blog.livedoor.jp/koshi_seinembu/ だよ。

文章

講評

『古志青年部年間作品集』を読んで

鎌田俊（「河」副主宰）

一枚の地球の空を鳥帰る

イーブン美奈子

夜濯や大宇宙の隅つこで

昼寝なぞ大きなお顔ですればよし

大景をデフォルメして捉える、俳句的な表現が魅力の作者である。一句目、〈一枚の地球の空〉として〈地球〉を射し込んだところが丁寧で気が利いている。地球の直径に比べれば、大気の層のなんと薄いことか。国境や紛争など人事から超然として地球の生態を描いたところに好感を持った。二句目の着目したところは、〈隅つこ〉という言葉で感慨を表して、寂寥と慎ましきがある。三句目は、〈大きな顔〉がユーモラスであり、「昼寝」に付随する、ある種の後ろめたさを吹き飛ばして痛快である。

半生は学んでばかり花菜摘む

石塚直子

辞書繰りて眠れるまでの夜長かな

マフラーで言へぬ言葉を隠しけり

このたび、この鑑賞欄にご縁をいただいで、担当の石塚さんとはなんだか通信のやりとりがあった。また、向島の句会でもお目にかかったことにより、古志青年部のうち、私のなかでなんとなく人物像が形成されている数少ないメンバーの一人である。俳句は、句会では匿名で選句にさらされ、投稿や冊子では記名で批評をうける。前者は作品論であり、後者は作家論の観点で作品を鑑賞することになる。一句目、上五中七の措辞単独でも瑞々しく共感を覚えるが、〈花菜摘む〉という季語に転換することで、卒業後の予祝となつている。二句目、学業の充足感をよく描いている。三句目、大判のマフラーを防壁とした女性の様子が切ない。

猫の子となりてお側に仕へたし

市川きつね

向日葵やおむすびだけのお弁当

なんといきいきと草を刈ることよ

一句目、群像の見えてきそうな、ドラマ性を予感させる。〈お側〉とは、作者にとつてどのよう

貴人であるのか興味がつきない。擬物化の対象として〈猫の子〉を選んだ点も、私的にすぎず共感できる範囲であった。二句目、わたくしごとだが、山行をご一緒にしたベテラン勢は、食事が実に簡素であったことを思い出した。手軽に栄養補給ができる、行動食のおむすびだけで済ませる食事から、寸暇を惜しんで物事に従事している様子が伝わってくる。その心持を、〈向日葵〉がまっすぐに語っている。三句目、句中の人物の澆漓とした風姿が気持ちよい。夏草、人間、ともに生命が溢れている。

大浅間小浅間みえて籠枕

大塚哲也

卒乳の妻へ注ぎ足すホットワイン

お風呂から子のはしやぐ声大晦日

一句目、籠枕の本意本情というものを、上五中七の叙景により的確に捉えている。避暑に訪れた軽井沢あたりの景だろう。遠景から近景への場面転換により、奥行のある空間を描いている。二句目、俳人として育児に向き合う作者に好感を持った。卒乳は、おおよそ一歳半ごろという。アルコールの影響を心配した節制から解放された妻への慈愛に満ちた作品。三句目、一般的な上五中七の景について、〈大晦日〉と日付を限定することにより立ち現われてくる句意がある。多幸を祈念する新年がすぐそこに来ている。

目つむればうかぶふるさと春の風

岡崎陽市

かげろふのなかに大仏座しゐたり

すず虫のはるかなこゑや籠の中

おどかな詠みぶりに、こちらの気持ちも自然と伸びやかになる。一句目、出身、在住ともに愛媛県の作者である。わたくしごとだが、幼少期に親の転勤の都合が重なったため、〈ふるさと〉という観念が希薄であるので、定住を思わせる作者の略歴には憧憬を持つ。定住に近い作者であるからこそ、経年により失われた〈ふるさと〉の光景に望郷を抱くのであろうか。〈春の風〉の匂いと手触りにも変化があるのだろう。二句目、陽炎に、仏の威徳を感得している。三句目、〈籠〉という狭小な空間から、〈はるかな〉心象風景へと転じたところがよい。

球児より監督泣いて雲の峰

金澤諒和

冬怒濤テトラポッドに噛みつきぬ

子どもらのあぎと美し卒業歌

一句目、人情味あふれる上席の所作を描いて、緊張を緩和している。日ごろは厳しい指導で通し

た監督が、勝敗の節目に涙を見せたのである。球場の彼方に輝く〈夏の雲〉に球児の青春性と監督の父性が形象化されている。二句目、擬人法により滑稽味が出ている。三句目、卒業式の光景を〈あぎと〉で捉えることで、それ以外は無個性な制服で統一された卒業生たちがイメージできる。すなわち、〈あぎと〉に焦点を絞ることで、学校の規律と秩序を読者に想起させているところが興味深い。卒業歌による〈あぎと〉の運動の大小には、子どもの性格や学校生活への思いが反映されていることだろう。

影ばかり大きくなりて枯野ゆく

関根千方

獅子舞の口よりのぞく此の世かな

みな春の塵よりなりてまた塵に

俳人を一面的に捉えるのは危険であろうが、関根さんの右三句からは無常観を感じた。一句目、上五中七の措辞は、枯野の真理である一方で、人間諷詠としても真に迫るものがある。大きく育った影を俳諧に転じて行きたい。二句目、円窓と角窓の「悟りの窓」と「迷いの窓」になぞらえるとしたら、〈獅子舞の口〉で縁どられた世界は、どのような内省を反映しているのだろうか。三句目、即物的に生命の儚さを捉えている。さはさりながら、〈春の塵〉から生じてふたたび〈塵〉と帰するまでの光陰の、なんとも不可思議であることか。

奥座敷どかりと占めて鰻食ふ

高角みつこ

いかやうにも女の顔や福笑

筍や人類は智恵惜しみなく

一句目、中七が見どころだと思った。暑気に対して開き直ったような物腰がおもしろい。二句目、お多福やお亀の顔の仕上がりのことであるが、女性一般のこととして顧みられる措辞にまとめたところがよい。そこが俳句の勘所でもあろう。化粧をはじめ、人当たりについてもいかようになるのだという、あらためて女性の逞しさを思った次第である。三句目、人類の前途に希望を持てるような、〈筍〉の象徴性が効いた作品である。

春泥に左手袋呉れてやり

竹下米花

寝転んで汽車を待ちをり星月夜

今生はたましひ預け案山子なり

一句目、春泥に手袋を汚したのか、落としたのか。受動的に表現すれば報告的な結果になったかもしれないが、視点を切り替えて〈呉れてやり〉と能動的に突き放した点がよかった。二句目、「印度」

の旅吟。客地の〈星月夜〉に抱擁されているかのようで、青春性と浪漫をつよく感じさせる。三句目、人間として俳人として、まだまだ未完であるという感懐であろうか。案山子は、農耕社会においては、共同体を守る神ともなる。

いういうと巢は本丸につばくらめ

丹野麻衣子

絹の道はろぼろと来し紙魚ならん

名人の牛蒡を引きしあとの穴

一句目、〈本丸〉という措辞が抜群に効いている。一番には、青空の城郭を思い浮かべる。次に、燕が営巢する家には幸福が訪れるという言い伝えを思うと、人それぞれに〈本丸〉と呼べる聖地があるのだろう。二句目、紙魚には、外来のものもあるという。好まれる昆虫ではない紙魚に対して、旅路を労わるようなおらかな詠みぶりが印象的である。三句目、牛蒡引き名人の技の冴えは、引き抜いたあとの穴の美しさにこそ表れている、というのが発見である。牛蒡を引くさまや引き抜いた牛蒡を詠うという正面を外したおもしろさがある。

餅よりも大き橙据ゑてあり

辻 奈央子

山彦を飲みこんで山笑ひけり

身を切つて俳句するなり初氷

指導理念は主宰や結社によりさまざまあると思うが、私の所属する「河」で言われる俳句三原則なるものは、一、リズム 二、映像の復元 三、自己の投影 という三点である。一句目、特大サイズの橙というよりは、一般的な大きさの橙なのだと思う。橙との比較により、小さくささやかな鏡餅の映像が復元され、核家族や一人暮らしなどの状況にある作者の自己投影が浮かび上がる。二句目、〈山〉のリフレインが、まさしく〈山彦〉のようでもあり、呵呵大笑する山容を彷彿させる。三句目、俳句との向き合い方は、遊び、余技、生き方など人によるが、どのような姿勢も俳句は受け入れてくれると言えようか。俳句表現に誠実に取り組んでいる方と思う。

静岡県金魚の形と教へけり

内藤 廉

葉の茂る畑に降り立つ胡瓜かな

束の間の流れの中や囃鮎

一句目、掲句により、静岡県が金魚にしか見えないようになってしまった。私の住む千葉県はチーバクんのイメージが強くなり、居住地を説明するさいには、チーバクんの鼻梁のあたりと言っている。静岡県では金魚の部位で説明するのだろう。二句目、〈降り立つ〉という大仰な表現により、かえつ

て胡瓜の形状の滑稽さが際立っている。三句目、他の作品とは異なり、ユーモアが目立たず抑制が効いている。作風の多様性のひとつなのか、深化の方向を暗示しているのか興味深い。

魯田の千葉が広々ありにけり

西村麒麟

初雀鈴の如きが七八羽

文鳥に覗かれてゐる花疲れ

一句目、言葉の連結順序の妙。〈千葉〉が風にそよぐ魯田の形容ともなり、爽やかである。二句目、〈鈴の如き〉という直喩に、日ごろ親しい雀を歳旦にみつけた、作者の心おどりが表れている。三句目、花を見てあそんで心身ともに疲れているのだが、〈文鳥に覗かれてゐる〉自分に気がついたときの、ちよつとした驚き。一片の花びらが着水して広げる波紋のような、かすかな心の揺れを捉えて可憐である。

でかく書く大といふ字の涼しさよ

森 篤史

歩き出すやうに消えゆく夕虹よ

丁寧な席に尻乗せ初電車

一句目、迷いなく大書した筆勢に〈涼しさ〉を感じている。〈でかく書く〉という措辞からは、作中の人物のモデルとして、書き方をならう子どもを想像した。二句目、虹を脚に見立てる作品は数多あるが、〈歩き出すやうに消えゆく〉と一步踏み込んだ表現により類想を一新している。三句目、まさかとは思うが、ユーモラスにまとめた小品で折に触れて思い出しそうである。こんなところにも、淑気がただよっているのだと感心した。

荒梅雨に四方を囲はれ昼餉かな

吉富 緑

雷や昼寝のわれを世に戻し
傾けて日傘の中の欠伸かな

一句目、目新しい措辞を提示するのではなく、日常生活をさっと生け作りに仕立てたような手際
のよさが光る。二句目、雷に驚いて目が覚めたのだが、〈われを世に戻し〉と雷様よりも上に出て
常識を転倒させている。天文と人間のスケールを逆転している。三句、一見、白日傘などは優雅で
もある。それに対して〈欠伸〉を持つてくることで、気負いのない生身の人間を描いている。

こまごまと開いてにぎやか蛭汁

渡辺竜樹

捕虫網あらがひて虫金色に

熊笹や月光に道拓けゆく

一句目、蜷汁の様子がありありと伝わってくる。蜷は出汁であるので食べないという向きもある。〈へにぎやか〉という措辞により、素直なよろこびが表出している。二句目、網をすり抜けた虫か、捕われて抵抗する虫である。虫捕りの過程で出くわした昆虫の生命の発露に心を寄せる様子が、〈金色に〉という詩語に結晶している。三句目、月下の熊笹に一陣の風が及んだのであろうか。作者の日ごろの懸案を露らす道筋が見えたのだろう。

青年部という括りでアンソロジーを編むことはたいへん意義があると思う。年齢層を限定することで見えてくる、作品の多様性や作者の固有性がある。また、今後も俳句と付き合っていくとすれば、長い俳句の生活が待ち受けている。俳句的な表現や発想は、年月とともに自然と身に付く。逆に言えば、年月とともに表現や発想が、俳句的に落ち着き収斂してしまう可能性がある。若年のうちから俳句に関わっていれば、表現と発想が成熟する時期は早晚訪れるが、そこから先を模索できる時間の猶予が存在することが、若手俳人にとっての僥倖であろう。

古志青年部の活動が俳句の世界をいつそう豊かにしていくものと思う。

「三十句競詠」を拝見した。少ない題で多作することは修練の機会となる。おそらく、作りこんでいくうちに、発想が枯渇していくような感覚と疲労を覚えたのではないか。季語についての予備の着想や在庫を一掃して風通しをよくする、そのようなことも「三十句競詠」の意義かと思つた。

以下、三句ずつ抄出する。

・「凧」「蕪」 石塚直子

凧も閉まる扉に滑り入り

レコードが終はり凧聞きゐたり

蕪引く母の背にゐしころのこと

一句目、〈滑り入り〉により、扉の閉まる描写の齣数が増えている。二句目、映像の復元力がある。三句目、土を通じた母恋。作者の根っこを感じさせる。

・「雪」「海鼠」 市川きつね

指二本くはへて笛や雪日和

しばらくは海鼠となつてやり過ごす

日出る国の隅つこ海鼠干す

一句目、指笛のことだが、言葉を分解して細かく表現したところがよい。二句目、海鼠に擬物化した自己カリカチュアに諧がある。三句目、『古事記』由来の海鼠を想起しておもしろい。

・「氷」「梟」 山内あかり

荒海を閉ぢこめてゐる氷かな

ふくろふや影には影のなかりけり

ふくろふは縦に伸びたり縮んだり

一句目、常識的な〈氷〉を打ち破る意外性がある。二句目、当然のことに目を向けて言挙げした再発見の妙。三句目、梟の生態を記号的に単純化した把握がよい。

(了)

■一九七九年、山口県生まれ。千葉県在住。所属「河」。

報告

青年部合宿会報告（十一月八日、九日）

石塚直子

合宿句会は古志青年部恒例の行事である。今回は例年と異なり、実際に合宿は行わず、二日間にあたる「鍛錬句会」となった。

一日目。参加者は、関根千方さん、高角みつこさん、丹野麻衣子さん、辻奈央子さん、石塚の五名である。高角さんは大阪からの参加である。

一日目はまず全員が、古志の東京句会に参加した。第一句座は当季雑詠、五句出句五句選。つづく第二句座は席題（ラグビー、熊手、沢庵）、三句出句三句選。

飯炊くやせめて沢庵厚く切る

奈央子

東京句会后、会場を移し再び句会。外はもう真つ暗であった。冬の日の短さを実感する。関根さんは御用のためお帰りとなり、参加者は四名に。第三句座目も席題（竹瓮、ひよんの実、柚子）三句出句三句選。

ひよんの実やまつ暗闇の穴一つ
存分に日浴びて柚子の丸々と

みつこ
奈央子

大谷主宰より「ひよんの実」「柚子」を見せていただいた。古志会員の方にいただいたという。それがそのまま席題となった。

本物の「ひよんの実」！歳時記にあるものの、実際に見る機会はそうそうない。「ひよんの実」は子どもの手にも収まるくらいほんとに小さい木の瘤のようで、驚くらい軽い。これを虫が、と思うと、頭の下がる思いである。笛にもなるらしいが、一体どれい音がするのだろうか。「ひよんの実」にすつかり心を奪われてしまった…。

最後、第四句座も席題（目張り、梟、茶の花）、三句出句三句選。

大徳寺遠州も見し茶の咲ける
梟に見守られつつ山くだる
穴といふ穴を目貼りし家を出ん

麻衣子
奈央子
直子

一日目はこれにて終了。気がつけば、部屋には柚子の香りがいっぱいに広がっていた。

二日目。二日目は会場を向島百花園に移す。静岡から高平玲子さんが加わり、この日の参加者は五名となる。昨年の静岡での合宿と同じメンバーでの句会となり、思い出話にも花が咲く。

第一句座、吟行句、五句出句五句選。

われら来る前に隙間を貼りおけよ
みな遊ぶ福祿寿様留守の間に
集まれば小菊のやうな我らかな
榎櫃の実どさりと落ちてもつたいな
はよおでん腹に詰めたき寒さかな
剥き出しの土鳩の足を時雨けり

麻衣子
麻衣子
直子
直子
直子
玲子

しぐるるやスカイツリーも野の草も みつこ

句会場で使用した座敷は「御成りの間」。丹野さ

んの句は、まるで自分たちが將軍になり「目張りをしておけ」と命ずるような、おかしみのある挨拶句。高平さんの句は「土鳩の足」が「むき出し」であるという当然の事実には、はつと気づかされる句である。

第二句座、席題（木の葉髪、鯨）、三句出句三句選。

將軍といふといへども木の葉髪 麻衣子

鯨とるほかは用なき男かな みつこ

俳諧に差し障りなし木の葉髪 奈央子

辻さんの「俳諧に差し障りなし」という句は気高く詠まれ、私は感服した。いくつになっても俳句を続けていく、そんな気概が感じられる。

ここで、お昼休憩。百花園名物のおでんと茶飯をみんなで食べる。身体が温まったところで、再び吟行へ。

午後はゲストに「河」の副主宰、鎌田俊様を迎えての句座である。鎌田様にも青年部員とともに百花園にて吟行を行っていた後、句座を行った。

第三句座は吟行句、五句出句五句選。大谷主宰・

鎌田様、それぞれに選句をしていた。以下抜粹。○は特選句)

大谷主宰選

○せつかくの御成といふに破芭蕉 麻衣子

○萩枯れて向かうのひとがよく見ゆる 麻衣子

猫の絵の福々として神の留守 みつこ

黙阿弥の男女は今もしぐるるや みつこ

おでん喰ふ我ら見つけて鳥並ぶ 奈央子

鎌田俊様選

○湧いてくる水の力や冬に入る

弘至

○枯れ菊の名をたしかめて惜しみけり

みつこ

落葉踏む鳩の体の軽さかな

玲子

猫の絵の福々として神の留守

みつこ

冬めきしものにたたずむ亀のあり

奈央子

山茶花や句を読み上げる声高し

奈央子

何者か潜んでをりし冬の水

直子

くろぐろと冬の泉にうつるもの

弘至

実椿つぼみ解く日は猫が知り

奈央子

句座では鎌田様にも丁寧なご講評をいただくことが

でき、大変ありがたく、また勉強になった。

句座の後、鎌田様より、鎌田様ご自身が俳句をはじめられるきっかけや「河」での句会について、俳

句の「とりあわせ」について等のほか、青年部員からの質問にも答えていただくなど、たくさんのお話をきく機会に恵まれた。

鎌田様はきさくな方で、部員の質問にもひとつひとつ丁寧な答えて下さった。終わりには吟行や句座を始める前よりも、座全体が和み、すっかり打ち解けた雰囲気となった。青年部のためにご足労いただいた鎌田様には心より感謝申し上げます。また、青年部の年間作品集（第四号）にもご講評をご執筆いただくということで、どのように書いていただけるのか、鎌田様のお人柄に触れますます楽しみです。ある。

今年も合宿句会が無事終了した。普段は会う機会がなく、「古志」本誌でしか名前をお互いに見ることしかない青年部員が一年に一度全国から集まり

句座を囲む。「古志青年部」という大切なつながり。同じ志を持つ仲間がいて、俳句ができることの幸せを心から噛みしめた二日間であった。

来年もまた。

二〇二四年 古志青年部年間活動記録

■ 一月五日（日）新春鍛錬句会に振り替え

■ 四月六日（日）句会

■ 五月三十一日（土）、六月一日（日）

千葉吟行句会に振り替え

■ 七月十六日（水）句会

■ 九月十八日（木）句会

■ 十一月八日（土）、九日（日）合宿句会

※ 一日目は東京句会と合同句会

※ 二日目は鎌田俊様を迎えての句会

□ 「三十句競詠」石塚・市川・山内

□ 「古志青年部ブログ」連載

※ 「タイ便り」イーブン美奈子さん

※ 「ヨルダン便り」市川きつねさん

編集 石塚直子
デザイン 関根千方

古志青年部年間作品集 第4号

2015年6月26日 発行
2015年11月1日 PDF版発行

発行者 古志青年部
発行所 古志社 (<http://www.koshisha.com/>)
印刷所 しまや出版

©2015 KOSHI SEINENBU